

第 1 章 有価証券・有形固定資産

3級では、「購入時の仕訳」、「定額法による減価償却」、及び「売却時の仕訳」について学習しました。2級では、まず、次のような内容について学習します。

有 価 証 券	有 形 固 定 資 産
<ul style="list-style-type: none"> ・ 端数利息の処理 ・ 売買目的有価証券の期末評価 ・ 満期保有目的債券の期末評価 ・ 有価証券の差入れ・預り ・ 有価証券の貸付・借入 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 定率法による減価償却 ・ 生産高比例法による減価償却 ・ 償却資産の買換え ・ 償却資産の除却・廃棄・滅失 ・ 建設仮勘定 ・ 修繕と改良

1. 有価証券

有価証券については、現段階では下表の内容で十分です。

	表示区分	表示科目	保有目的による分類	評 価
①	流動資産	有 価 証 券	売買目的有価証券	時 価
②	固定資産	関係会社株式	子会社株式（支配目的：50%超保有） 関連会社株式（支配目的：20～50%）	原 価
③	投資その他の資産	投資有価証券	満期保有目的の公社債	償却原価
④			その他有価証券 <small>①～③以外の有価証券</small>	株式は時価

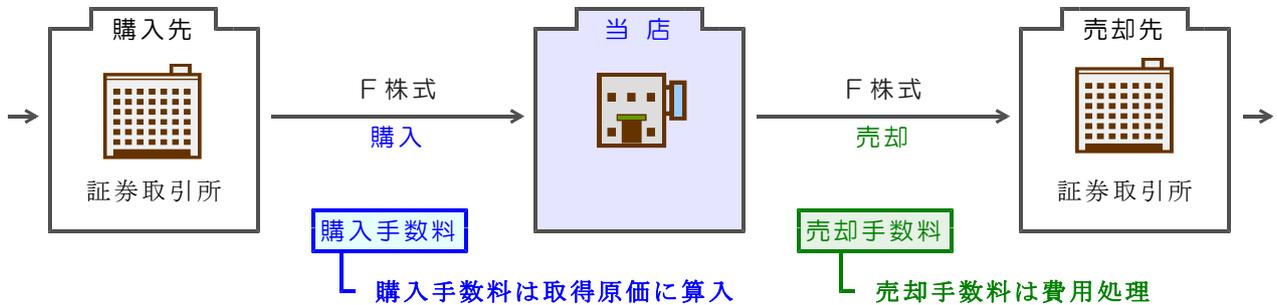
（注）1年内満期公社債については、「有価証券」で表示し、「流動資産」に区分する。

貸借対照表

資産の部	負債の部
I 流動資産 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px 0;">有価証券</div> II 固定資産 1. 有形固定資産 2. 無形固定資産 3. 投資その他の資産 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px 0;">投資有価証券</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px 0;">関係会社株式</div> III 繰延資産	I 流動負債 II 固定負債 <div style="background-color: #ffffcc; text-align: center; padding: 5px;">純資産の部</div> I 株主資本 1. 資本金 2. 資本剰余金 3. 利益剰余金 4. 自己株式 II 評価・換算差額 III 新株予約権

1-1 3級の復習

3級では、有価証券の購入時及び売却時の仕訳を中心に学習しました。仕訳時のポイントは、購入手数料は有価証券の購入原価に算入し、売却手数料は費用処理します。



(1) 売買目的でF株式100株を500円/株で購入し、購入手数料600円とともに現金で支払った。

(借方) 売買目的有価証券	50,600	(貸方) 現金	50,600
---------------	--------	---------	--------

$$1 \text{ 株あたり購入原価} = (500 \times 100 \text{ 株} + 600 \text{ 円}) \div 100 \text{ 株} = @506 \text{ 円/株}$$

(2) F株式60株を580円/株で売却した。その際、証券会社に売却手数料500円を現金払いした。

(借方) 現金	@580 × 60株	(貸方) 売買目的有価証券	@506 × 60株
		有価証券売却益	4,440
(借方) 売却手数料	500	(貸方) 現金	500

売却手数料の支払仕訳とまとめて、次のように仕訳を行うこともあります。

(借方) 現金	34,300	(貸方) 売買目的有価証券	@506 × 60株
売却手数料	500	有価証券売却益	4,440

(3) 売買目的でI社社債、額面総額100,000円を1口100円につき98円で購入し、購入手数料1,000円とともに現金で支払った。

(借方) 売買目的有価証券	99,000	(貸方) 現金	99,000
---------------	--------	---------	--------

$$1 \text{ 口あたり購入原価} = (98 \times 1,000 \text{ 口} + 1,000 \text{ 円}) \div 1,000 \text{ 口} = @99 \text{ 円/口}$$

(4) 売買目的で保有していたI社社債のうち、額面60,000円を1口100円につき96円で売却し、売却代金を現金で受け取った。この際、証券会社に売却手数料400円を現金で支払った。

(借方) 現金	57,600	(貸方) 売買目的有価証券	59,400
有価証券売却損	1,800		
(借方) 売却手数料	400	(貸方) 現金	400

まず、購入単価@99円/口の有価証券を@96円/口でしか売却できなかったため、売却損が600口分で $(99 \text{ 円/口} - 96 \text{ 円/口}) \times 600 \text{ 口} = 1,800 \text{ 円}$ 発生します。

設例1

F社は、平成×4年4月1日に売買目的で、I社社債（額面1,000,000円、年利率7.3%、利払日3月末、9月末）を@100円につき@96円で購入し、小切手を振出して支払った。F社は、I社社債を翌月の19日に@100円につき@97円でN社に売却し、端数利息とともに小切手で受け取った。そこで、F社における（1）購入時の仕訳、（2）売却時の仕訳、及びN社における（3）購入時の仕訳、（4）社債利札と引換えに現金を受け取った時の仕訳を行いなさい。

なお、端数利息の計算は、日割り計算による。

(1) F社の購入時の仕訳

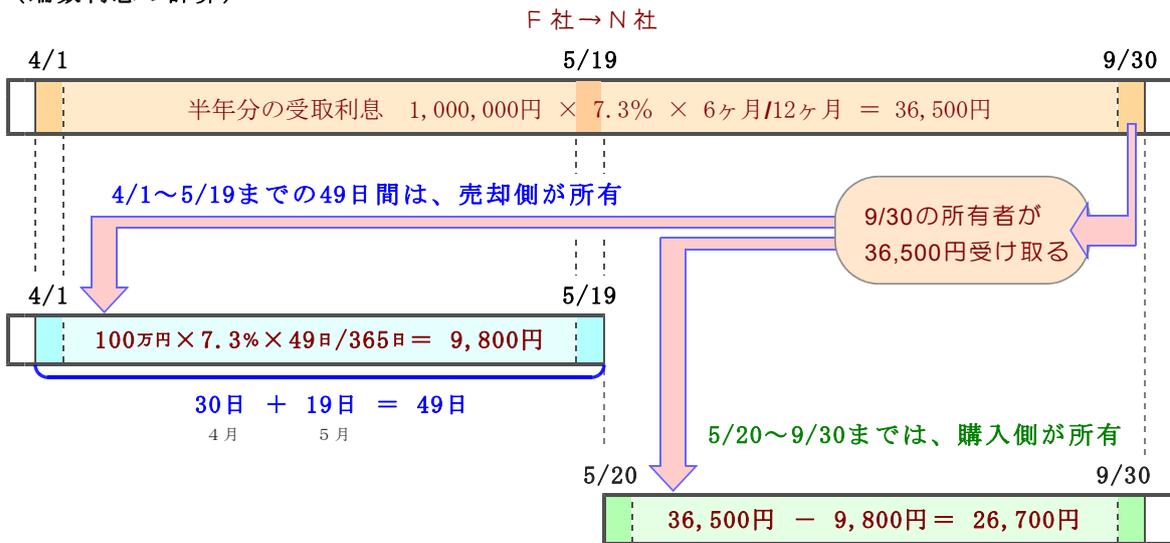
4/1	(借方) 売買目的有価証券	960,000	(貸方) 当座預金	960,000
-----	---------------	---------	-----------	---------

(2) F社の売却時の仕訳

5/19	(借方) 現金	970,000	(貸方) 売買目的有価証券	960,000
			有価証券売却益	10,000
	(借方) 現金	9,800	(貸方) 有価証券利息	9,800

※ 答案用紙には、（借方）をまとめて、現金 106,800円とする。

(端数利息の計算)



(3) N社の購入時の仕訳

5/19	(借方) 売買目的有価証券	970,000	(貸方) 当座預金	979,800
	有価証券利息	9,800		

(4) N社の利息受取り時の仕訳

9/30	(借方) 現金	36,500	(貸方) 有価証券利息	36,500
------	---------	--------	-------------	--------

N社の有価証券利息

5/19 当座預金	9,800	9/30 現金	36,500
5/20~9/30までの受取利息			

1-3 売買目的有価証券の期末評価

売買目的で保有する有価証券については、「今売れば、いくらになるのか」という金額を示すのが合理的なため、会計年度末の時価で評価することになっています。

従って、売買目的有価証券のB/S価額を時価で評価するとともに、時価と簿価との差額を評価損益とするための、決算整理仕訳を行うこととなります。

設例2

F社は、当会計年度中に売買目的でI株式1,000株(280円/株)、N株式2,000株(300円/株)を取得した。両株式の会計年度末における1株あたり時価は、I株式が360円、N株式が290円であった。そこで、F社が行うべき決算整理仕訳を示しなさい。

	取得原価	期末時価	評価損益
I株式	@280×1,000株 = 280,000円	@360×1,000株 = 360,000円	80,000円
N株式	@300×2,000株 = 600,000円	@290×2,000株 = 580,000円	△ 20,000円
		評価益	<u>60,000円</u>

(決算整理仕訳)

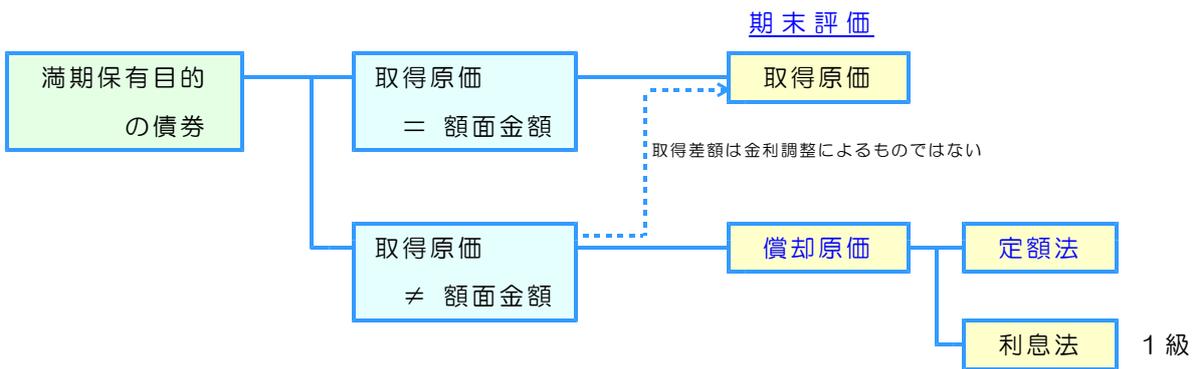
(借方)	(貸方)
------	------



財務諸表では、評価損と評価益は相殺して、純額で表示するんだ。

1-4 満期保有目的債券の期末評価

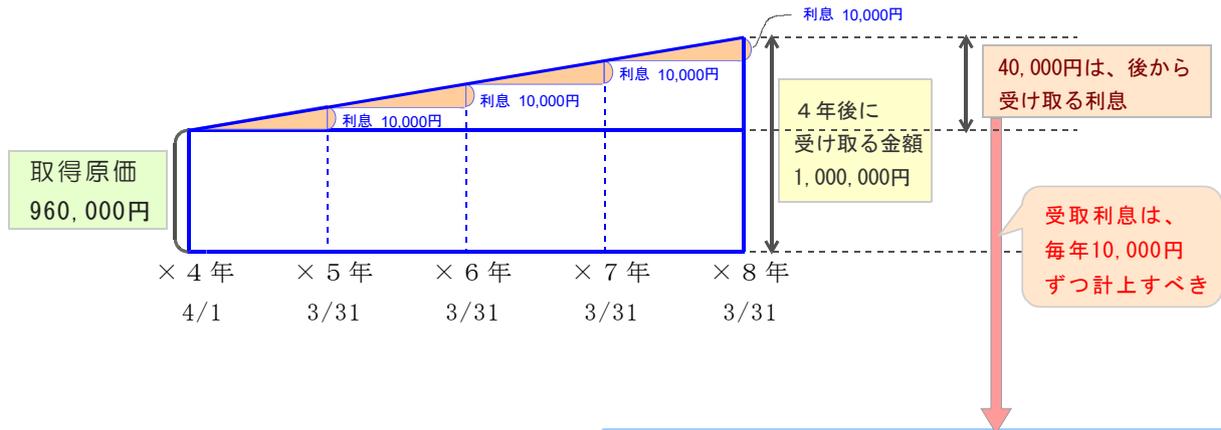
満期保有目的の債券については、売却する予定がないため、時価で評価する必要はありません。このため、取得原価で評価するのが原則となります。ただし、割引発行(ex. 96万円貸してくれたら、4年後に100万円返します)された公社債を取得した場合は、割引額(ex. 4万円)は利息の性格を有するため、償還期間を通じて、受取利息を計上すると同時に、取得原価(ex. 96万円)を額面金額(ex. 100万円)に近づける手続き(償却原価法)を適用します。



設例3 償却原価法による満期保有目的債券の評価

F社は、平成×4年4月1日に満期まで保有する目的で、I社社債（額面1,000,000円）を@100円につき@96円で購入し、小切手を振出して支払った。なお、当社債の償還日は、平成×8年3月31日である。また、F社は3月決算であり、通常の運用益は適正に処理されているものとする。

F社が保有する満期保有目的債券（I社社債）は、割引発行（96万円貸してくれたら、4年後に100万円返します）されたもので、その割引額（4万円）は利息の性格を有するため、償還期間を通じて、受取利息を計上すると同時に、取得原価（96万円）を額面金額（100万円）に近づける手続き（償却原価法）を適用する必要があります。



期末評価を取得原価で行う場合

(購入時)

満期保有目的債券	960,000	当座預金	960,000
----------	---------	------	---------

(決算整理仕訳) × 5年3月31日

仕訳なし			
------	--	--	--

(決算整理仕訳) × 6年3月31日

仕訳なし			
------	--	--	--

(決算整理仕訳) × 7年3月31日

仕訳なし			
------	--	--	--

(償還時) × 8年3月31日

当座預金	1,000,000	満期保有目的債券	960,000
		有価証券利息	40,000

期末評価を償却原価で行う場合

(購入時)

満期保有目的債券	960,000	当座預金	960,000
----------	---------	------	---------

(決算整理仕訳) × 5年3月31日

満期保有目的債券	10,000	有価証券利息	10,000
----------	--------	--------	--------

(決算整理仕訳) × 6年3月31日

満期保有目的債券	10,000	有価証券利息	10,000
----------	--------	--------	--------

(決算整理仕訳) × 7年3月31日

満期保有目的債券	10,000	有価証券利息	10,000
----------	--------	--------	--------

(償還時) × 8年3月31日

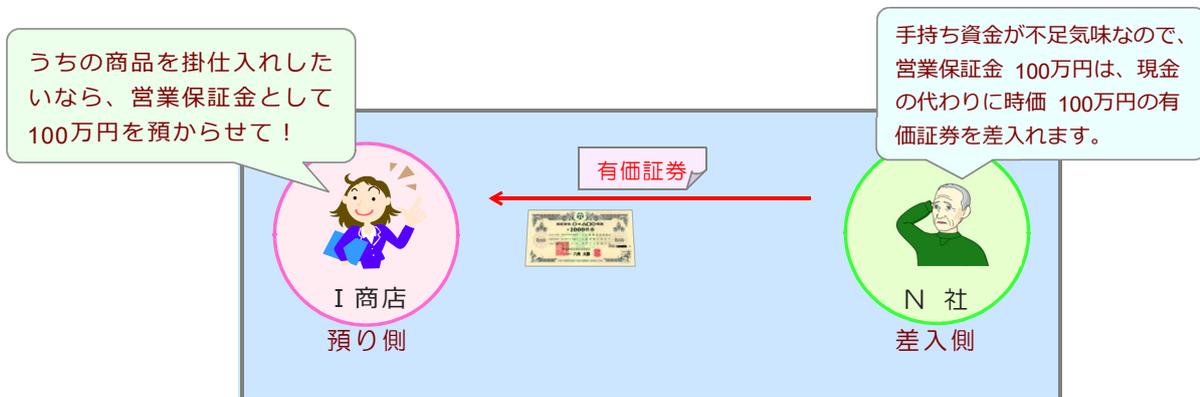
当座預金	1,000,000	満期保有目的債券	990,000
		有価証券利息	10,000

今回は期首に取得していたので月数按分は必要なかったけど、割引発行された満期保有目的債券を期中に取得した場合には、月数按分が必要になるわね。



1-5 有価証券の差入れ・預り

借入資金の担保として、あるいは営業保証金の代用として、借入先や取引相手に有価証券を差入れる場合があります。相手に自分の有価証券を差入れても、所有権は自分のままですが、手元にある有価証券と区別するために、有価証券勘定から「**差入有価証券勘定**」に振り替えることになっています。



設例 4

N社は、新規の仕入先であるI商店から、営業保証金を要求されたが、手持ち資金が不足していたため、売買目的で保有しているF株式（簿価 800,000円、時価 1,000,000円）を営業保証金の代用とすることでI商店と合意し、直ちに有価証券を差入れた。

N社（差入側）の仕訳

(借方)	(貸方)
------	------

差入れた側は簿価で、預かった側は時価よ



また、有価証券を差入れた相手側も、所有権の移転を伴うものではないので、本来であれば資産計上する必要はないはずですが、差入れられた有価証券が自己の管理下に置かれるとともに、将来返還する義務を負ったことを明らかにするために次のような仕訳を行います。

I商店（預り側）の仕訳

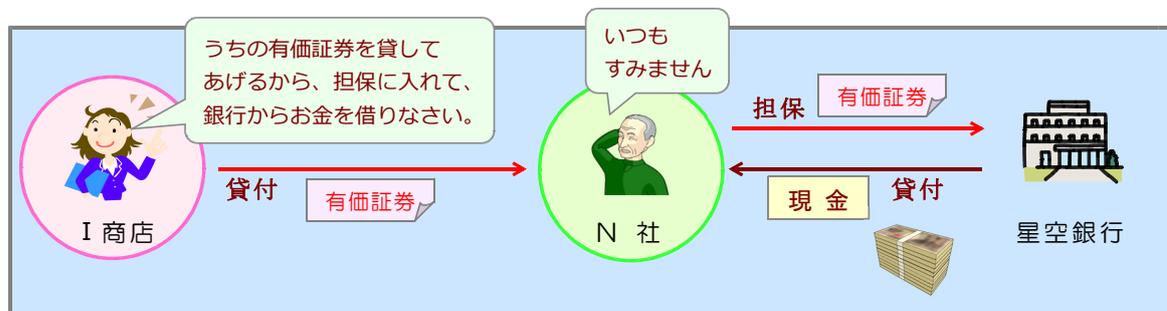
(借方)	(貸方)
------	------

語呂合わせは、「差入れた有価証券は、保安官（保管）が預っている」でいこうかなあー



1-6 有価証券の貸付・借入

取引先が資金調達を円滑に進められるように、取引先に対して、自己の所有する有価証券を貸付ける場合があります。相手に自分の有価証券を貸付けても、所有権は自分のままですが、手元にある有価証券と区別するために、有価証券勘定から「貸付有価証券勘定」に振り替えることになっています。



設例 5

I 商店は、N 社の資金調達の円滑化を図るため、I 商店が売買目的で所有する S 株式（簿価 900,000円、時価 1,000,000円）を貸付けた。

I 商店（貸付側）の仕訳

(借方) 貸付有価証券	900,000	(貸方) 売買目的有価証券	900,000
-------------	---------	---------------	---------

貸付けた側は簿価で、借入れた側は時価よ。

また、有価証券を借入れた側も、所有権の移転を伴うものではないので、本来であれば資産計上する必要はないはずですが、借入れた有価証券が自己の管理下に置かれるとともに、将来返還する義務を負ったことを明らかにするために次のような仕訳を行います。

N 社（借入側）の仕訳

(借方) 保管有価証券	1,000,000	(貸方) 借入有価証券	1,000,000
-------------	-----------	-------------	-----------

借り入れた時点の時価が帳簿価額になっているので、次に、担保に差し入れたときはこの簿価を使って仕訳よ。

さらに、この借入れた有価証券を、銀行に担保として差し入れた場合には、次のような仕訳を行います。なお、差入時の時価は 800,000円であったとします。

N 社（差入側）の仕訳

(借方) 差入有価証券	1,000,000	(貸方) 保管有価証券	1,000,000
-------------	-----------	-------------	-----------